

主体的にアートに取り組もう ―ステンド絵画づくり―

中学部 中野 紋

1 はじめに

美術科の授業とは、生徒個々が興味のある素材や題材に出会い、創造する喜びや表現の自由を感じ、自身の可能性を見出すことができる場である。生徒たちがそこに辿り着くためには創作活動を「楽しむ」ことが必須であり、それには「主体性」を持って取り組むことが必要であると報告者は考える。また、その主体性を引き出すためには「自信を持つ」ことが重要であると考え。生徒の中には絵を描くことや創造することに対して自信を持つことができず、取り組みに対して積極的に活動することが難しい生徒もいる。そのような生徒も含めて全員が安心して活動に参加し、主体的に取り組むことのできるような授業づくりをめざす。今回に限らずこれまで重要としてきたテーマであるが、報告者自身が初めて中学部1年生の生徒を対象とする。そのためこれまで経験してきたことに加え、新しく工夫を考えたり気をつけようと心掛けたりしたことを含め、実践的に取り組んだ内容を報告する。

2 授業の概要

- 1) 対象生徒 中学部第1学年C班 (13名)
- 2) 授業名 「ステンドグラスのような絵を描こう！」
- 3) 日時 令和3年12月17日(金) 第3、4時限(10:25~11:55)

3 授業のねらい

1) 対象生徒の実態と課題

C班の生徒は絵を描くことが好きな生徒が多く、自分のイメージを膨らませて自主的に制作を進めていくことができる。その一方で、美術や作業学習において「自分で創造する活動」そのものに抵抗がある生徒もいる。全体として穏やかで楽しい雰囲気での学習班であるが、その反面、意思表示をしたり自己主張をしたりする様子はあまり見られない。道具の使い方や決められたルールを守ることは大切であるが、逸脱しないようにという思いから「こんなことやってもいいのかな」と躊躇している様子が見受けられる。その思いがなかなか言葉にできず、せっかくの機会を逃してきたこともあるのではないかと思う。やってみたいことが見つかったらやってみたいと言えるようになること、自由に自分を表現しているということ、そういった自主的に学ぶ喜びや楽しさの経験を積むことが課題である。

2) 教材観

本授業では「ステンドホビー」という教材を使用する。透明色の塗料を用いて簡単にステンドグラス風の作品をつくることのできる教材で、今回は透明のプラスチックシートの上に描いて作品を制作する。水溶性アクリル樹脂塗料で、9色の透明色(赤・青・黄・緑・紫・オレンジ・桃・空・透明)と1色の不透明色(黒、縁取り用)の10本セットのものを使用する。1色ずつペン型の容器に入っており、指で押しながら塗料を出して画面に塗布していく。この教材は色彩の学習に適しており、単色での使用はもちろんのこと、混色したりグラデーションを作ったりすることで色彩の美しさを味わうことができる。赤・黄・青の三原色を混色して自分で色をつくること(赤+青=紫・赤+黄=オレンジ・黄+青=緑)

を試したり、複数の色を混色して自分で色をつくったりして「こんな色ができた！」という発見をしながら楽しく色彩の学習に取り組むことができる。また、透明の塗料であるため「光を透過する」という特徴を持っている。「この色を混ぜたらどんな色になるのだろう」「光を当てたらどう見えるのだろう」という視点を大切に、興味を持って主体的に色彩についての学びを深める学習をすることができる題材である。また、意外性や探究心を持って楽しく活動することができる教材である。

3) 指導観

自主的に創作活動に取り組むためには、まず創造することを心から楽しみ、表現することに対して自信を持つことが大切である。しかしながら、苦手意識があったり、これまでの様々な経験から自信を持つことができないでいたりする生徒は少なくない。少しずつでも安心して自分を表現することができるようになるためには、生徒一人ひとりの思いや発言を大切に、肯定的に伝えることが重要だと考えている。扱う材料や道具などの設定はあるが、生徒から「こんなことがしてみたい」といった積極的な発言があった場合は可能な範囲で対応するよう心掛けている。

美術や作業学習において「自分で創造する活動」そのものに抵抗がある生徒への対応として、まずは自分で挑戦することができるような声かけを行い、難しいようであればこちらで用意した見本を写すまたは見本に色を塗るなどの作業を本人が選択できるようにしている。そういった生徒も含めて全員が創作活動に参加し、楽しいと感じる瞬間を見つけ、友だちと一緒にその経験を重ねることで「自分を表現してもいいんだ」という安心感を持つことができるような授業展開を目指す。

他者から認められることで表現する喜びや意欲が湧き、そのような経験を少しずつ積み重ねていくことで自信をつけて「もっとやってみたい」という気持ちに繋げ、美術に限らず全てにおいて主体的に学ぶ力をつけることができるように指導する。

4) 授業の目標

単元目標

- ・画材の特性や使用方法を理解することができる。A
- ・自分なりの工夫を考えた画面を構成し、楽しみながら制作する。B
- ・作品を鑑賞し、互いの良さを認め合うことができる。C

本時の目標

- ・画材の特性や使用方法、注意点などの説明を聞いて理解することができる。
- ・着色作業を楽しみ、具体的な表現のイメージを持って取り組むことができる。
- ・様々な表現方法を学び、作品制作に生かすことができる。

5) 単元の評価基準

単元の評価基準

A 知識・技能	B 思考・判断・表現	C 主体的に学習に取り組む態度
① 「ステンドホビー」の特性を知り、塗料を押し出して色を塗る・光を透過する・混色やグラデーションをつくることができる。 ② 画材の使用方法を理解し、順序立てて作業に取り組むことができる。	① 自分が表現したいものを見つけ、具体的にアイデアスケッチを描く。 ② 光の透過性・混色・グラデーションといった「ステンドホビー」の特性を活かした画面構成を考えることができる。	① 友だちの作品を見て表現の幅を広げ、作品制作に生かすことができる。 ② 互いに作品を鑑賞し、描いているものの形や色合い、表現方法について良いところを見つけ合って伝えることができる。

本時の評価基準

- ・ステンドホビーの使い方について知り、その特性を理解することができる。「A②」
- ・見本を見ながら説明を聞き、具体的な表現のイメージを持って制作に取り組むことができる。「B②」
- ・友だちの作品を見て表現の幅を広げ、作品制作に生かすことができる「C①」

4 授業の内容と経過

本時の学習過程

※特に子どもの主体性を引き出すために留意する点を下線で示す

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点及び支援の手だて等
導入 15分	<ul style="list-style-type: none"> ・ 始まりの挨拶・出席確認をする ・ 前回までの内容を復習する ・ 本時の活動内容を聞く <ul style="list-style-type: none"> ・ 使用する画材の特性を知る ・ 画材の使用方法的参考動画を見る ・ 使用方法、注意点を聞く 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 見本を窓辺に持って行き、光が透過する様子を見せる。「色の混色」「グラデーション」について、資料や見本を示しながら説明する <ul style="list-style-type: none"> ・ 画材の使い方を知り、参考動画を提示しながら説明する ・ 黒色（不透明色）は縁取りのみ、蓋をなくさないようにすること、混色する際にはペンの後ろの突起部分を使って色を混ぜること、混色後はティッシュペーパーで塗料を拭き取ること、各テーブルで譲り合って使用すること、などの注意点を説明する

<p>展開 55分</p>	<ul style="list-style-type: none"> 作業の準備をする 着色作業を開始する 発見したことを周りの指導者や友だちに伝え、共有し合う 分からないことがあれば質問する (10分間休憩) 着席して4時限目の流れや作業終了時間を聞き、時間を意識しながら制作に取り組む 	<ul style="list-style-type: none"> ペン型の容器の中央部分を押しながら絵の具を出し、色を塗ってみるように声をかける <u>混色やグラデーションなどの表現方法について発見したことがあれば周りの指導者に伝え、友だち同士でも伝え合うように説明する</u> <u>作品を見て回り、生徒一人ひとりに肯定的な声かけを行う</u> <u>工夫している表現方法を見つけ、全体で共有することができるようにそれぞれの座席へ作品を持って行き見せてまわる</u> <u>「どのようにしてこの色をつくったのか?」「どういう塗り方をしたのか?」等の問いかけを行う</u> 見本を見ながら制作する生徒に対して、スムーズに作業に取り組むことができるように声かけを行う
<p>まとめ 20分</p>	<ul style="list-style-type: none"> 作業を終える 後片付け、清掃をする 着席する 本時の取り組み内容を振り返る 次回の内容の説明を聞く 終わりの挨拶をする 	<ul style="list-style-type: none"> 振り返りを行う <ul style="list-style-type: none"> どのような色ができたか 色を塗ってみて発見したこと 工夫したこと 以上3点の質問をして生徒の発表の機会を設ける 気づいた点、工夫していた点などの話しをして振り返る

5 結果

1) 生徒の様子

本時の活動を楽しみにしていた生徒が多く、導入部分での復習や教材の使用方法の資料映像を見ている間などの表情を見ても、それぞれが真剣な顔つきで見入っていた。教材の使い方や注意点などたくさんあったが、話を聞き漏らすことなく正しく扱うことができている生徒がほとんどだった。着彩が始まると「先生見て!」「この色を混ぜたらこうなった!」など次々に発言が出始め、意欲的な雰囲気です授業が進んでいった。友だちと一緒にいろいろと試してみる生徒や、教員からアドバイスをもらって挑戦する生徒、自分のイメージをめざして黙々と作業する生徒…と、和やかな雰囲気の中でもそれぞれの制作

時間を過ごすことができていた。休み時間には休憩を促したが、多くの生徒が手を止めることなく続けていた。これまでの授業でも時々見られるが、今回は特に自主的に取り組む姿が見られた。

2) 授業を参観した教員による意見のまとめ

- ・完成作品がカラフルで、見ていてワクワクして意欲が湧くものだった。
- ・完成作品を提示することで「やってみたい」という意欲を引き出すことができる。
- ・ステンドホビーという教材そのものが魅力的である。
- ・否定的な声かけがなかった。生徒が安心してのびのびと取り組むことができる環境づくりができていた。
- ・生徒の活動を褒めて否定しないことで表現の自由度を保障していた。
- ・行動を認めたいうで次の課題へのアドバイスを行っており、「やってみよう」という気持ちに持って行く流れをつくっていた。
- ・授業の開始前と休み時間の間に音楽を流すことで、授業時間との切り替えになっていた。音楽に合わせて歌ったり踊ったりしていた生徒が、チャイムが鳴ると一斉に着席して切り替えることができていた。
- ・休み時間に入り休憩を促しても、自ら制作を続ける生徒が多数いた。

6 考察

1) 報告者が意図して行うことができたこと

今回このような機会をいただき、自分が大切にしていることを改めて確認しながら授業に取り組むことができた。初めて中学部の生徒を指導するということもあり、これまで以上に、基本的な言葉や道具の説明を丁寧に行ったり内容を具体的に提示したりすることを心がけて行った。積極的に発言することができる生徒については普段の関わりをベースにしながら褒めることを意識し、自分から発言することが少ない生徒については、こちらから声をかけてまず作品の良いところを見つけて褒めるようにした。そのやりとりの中で本人から発言を引き出すことができた場合は、それを見逃さずに受け止め、必ず肯定的な応えを返すようにした。場面緘黙のある生徒についても同じで、必ず声をかけて褒めることを行った。これらの肯定的な声かけは普段から行っていることであるが、4月当初の様子と比べると表情も全く違い、今回の授業を行ったことで改めて日々の積み重ねの成果を感じられることができた。

2) 助言で気付いた報告者の強み

報告者の授業では「楽しい雰囲気での授業」を大切にしており、授業中は喋らず静かに制作するというよりも、友だちや指導者と会話をしながら楽しく制作してもらいたいと考えている。なぜなら、そのような発言しやすい雰囲気の中から子どもたちの発想は生まれてくるからである。「こんなことがしてみたいな」「これはしたらいけないんじゃないかな」と心の中で思い、質問することもできず、「やっばりやめておこう」となってしまうことは少なくない。そうではなく、できる限り生徒の自主性を引き出すことができるように、美術の授業は楽しく和やかな雰囲気をつくるよう心がけている。ただし、説明を聞くとときや友だちが発表するときは私語を止め、その人の方を向いて話を聞く姿勢をとるように指導している。メリハリをつけるという意味では、授業と休み時間の切り替えについても言える。4月当初は緊張していたり友だちと馴染むことが難しかったりする様子が見受けられたため、少しでも関わるきっかけになればと考え、授業前と休み時間に音楽を流すことを試すようになった。そのうち友だちと一

緒に口ずさんだり踊ったりしてその時間を楽しむ様子が見られたため継続して行っている。今回の授業を観ていただいた際に、音楽を流すことで授業時間と休み時間の切り替えがしやすい工夫になっていて、それは「聴覚支援」を行っていると教えていただいた。また、生徒の発言や行動に対して否定せず、肯定的な言葉かけを行うことは「ポジティブ行動支援」になっているということも教えていただいた。今回この機会に、知らず知らずのうちにそういった支援を取り入れることができているのだと気付かせてもらい、これは報告者にとっても自信に繋がり大きな収穫であった。

3) 今後の課題

今回の授業では、普段から親しみのある平面での作品制作を題材にしたため比較的取り組みやすい内容であったが、今後は新しい分野での学習の機会も増えてくる。経験のないことへの取り組みに対して消極的になってしまう生徒が少なくないと予想されるため、せつかくの自信をなくしてしまうことのないような授業構成を考えていく必要がある。完成形のイメージを持つための単元でも見本を制作しているが、新しい分野については見本を一つだけ提示するとそれが正解だと認識してしまう可能性がある。そのため、さまざまな作品例を提示して表現の幅を広げることができるようにしていく必要がある。

今後も主体的に取り組む姿勢を養うため、今回大切にしたことや気付いたことを意識して引き続き行っていく。中学部での学校生活を送る中で自分を表現する喜びや楽しさを学び、美術に限らずその力を今後発揮していくことができるように、継続して行う。